
お嬢様の憂鬱 上

瑠紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お嬢様の憂鬱 上

【ZPDF】

Z0657D

【作者名】

瑠紀

【あらすじ】

僕は彼女に恋愛感情を一切抱いていなかった。私は彼に好きと思つたことなんて一度もなかつた。はずなのに・・・お嬢様とお坊ちゃんの我が儘コメディー。「結婚しなさい。しないと・・・」「僕はあなたのこと嫌いなんです!」・・・今、最強のコンビが来る!!

アンケート（主人公、サブ主人公紹介）（前書き）

作者が受験生のため、更新が遅れます。
ご了承の上でお読み下さい。 by 瑠璃

アンケート（主人公、サブ主人公紹介）

瑠斗「ちわ～ 今日は璃紗さんとレストランに来ました～」

璃紗「何してるの？」「つか、誰に向かっていつているの？」「

瑠斗「そりゃパソコン画面の向いの・・って誰？」

璃紗「しらないわよ。頭大丈夫？それよりテーブルの前になにかあるけど・・」

瑠斗「・・？あ、ほんとだ。何コレドキドキアン」
バシュッ

瑠斗「読もうと思ったのに、何するんですかーーむー。」

璃紗「なに？これ。アンケート？」

瑠斗「む・・人の話流したな。まあいいや。アンケート？ああ、そうみたいですね。やります？」

璃紗「田の前にあるのにやらない訳ないじゃない。山が田の前にあつたら上のと同じ原理よ。」

瑠斗「学校の課題なんかはやらなくていい・・・それにゼーフた
い景品ねらいだろ・・・・・・」

璃紗「何か言いましたか？」

「うう、やつが一歩も出でぬ」

あなたの名前は？

璃紗「私の名前も知らないの？」
天乃宮 璃紗、天乃宮財閥の次女です」

あなたの年齢は？

瑠璃斗「かくさいんですね」

隱すほどの歳じやないもの、

あなたの血液型は？

瑠斗「どうりで、変わってる性格なんですね」「瑠紗「む・・・」

星座は？

璃紗「さそり座つと」

性別は？

璃紗「乙女」

瑠斗「何のためらいもなく言いましたね」

璃紗「なにか？」

瑠斗「いえ、ある意味すゞいなーって思いました。」

璃紗「・・・・・」

性格は？

璃紗「いつも暇で暇でしあうがない美しい才色兼備の乙女ってとこかしら」

瑠斗「否定が出来ない・・・」

婚約者または恋人はいますか？

璃紗「彩梓あやしや也瑠斗りゅうとつと」

瑠斗「それって恋人ですか婚約者ですか」

璃紗「どっちもよ」

瑠斗「・・・・・」

外見は？

璃紗「さらさらロングヘアのダークパールのよつな黒髪に透き通るような白い肌ね。」

瑠斗「・・・・・疲れた・・・つてかよくここまど自意識過剰に・・・」

璃紗「なにか？」

瑠斗「何もいえない・・・」

お疲れ様でした。次はお連れの方にお聞きします。

瑠斗「マジで疲れた、」

あなたのお父さんは？

彩梓也 瑠斗

年齢は？

14歳

血液型は？

瑠斗「O型です」

璃紗「あら？ O型なのに変なところでまめよね」

瑠斗「誰のせいですか・・・」

作者・O型の皆様スミマセン。ちなみに作者もO型です。

星座は？

璃紗「なんか、あきてきたわね。」

瑠斗「え・・・？」

【作者代理 おとめ座】

性格は？

璃紗「弟的な性格よね。でも、時々見せる男っぽいところがたま
んない〜」

瑠斗「・・・」

恋人や婚約者は？

瑠斗「無理やりですが天乃宮

璃紗「あまのみや

璃紗「・・・」

外見は？

璃紗「小麦色の肌に大きな目少し小柄な女の子みたいな顔。」

瑠斗「ほめてるんですか、けなしてるんですか。」

璃紗「あら、ほめてるつもりよ?」

瑠斗「そうですか・・・」

二人ともお疲れ様でした。

景品として割り箸を差し上げます。

瑠斗「うわーー！きつたねー。そう思わない？璃紗さん。」

璃紗「・・・許さない」

瑠斗「うわーー！殺氣が！」

レストランの店員「割り箸は貴重な資源ですーーもうえるだけうれしいと思いません。」

瑠斗「・・・」の店もう来るのやめよ・・・

璃紗「そうね・・・」

レストランの店員「まいど有難ひいわこましたあー」

璃紗&瑠斗「態度かわんの早ーー！」

桜咲き乱れる中僕の心も咲き乱れてます。ああ、泣きたい……

ああ、今日はえらく晴れているな。

周りには桜が乱れ咲いているし。
なんか人生桜色？（薔薇色と掛けてみた
あ、でも彼女が居ないんだよな

ま、興味ないけど。

そんななるん気分で足通り通りっていた。（足通り……金持
ちの使う道。通称成金道）

今日は月曜日。

冬休みが終わって今日から登校。

今は登校中。

「……ちよつと、貴方。瑠斗じゃないの？」

げ……

ま、まさか……

幼稚舎の時に振り回してきた近所のねーちゃん……
しかもちよー金持ちのお嬢様。
そして俺が世界で一番嫌いな奴。

前言撤回。

今日は運勢最下位。

「……瓶に出でるんだけど。」

やば……

つい、声に出してしまった。

・・・ここま、どうにか切り抜けるしかないな。

「こんにちわ。璃紗さん。僕、これから学校なんで・・・
模範解答を述べた。

なんかのTVで見た「嫌いな人に会ってしまった時の逃げかた」
そして 逃げようとしたけど無駄だった。

「あら、ちょっとぐらいいじじゃない。今日はいっしょにいて貰いたいのだけど。」

う・・・・早速来たよ。

僕を操るときにつかう璃紗さんの必殺技。

璃紗さんの甘えた声。

俺は「少し弱い・・・

「でも、今日がぼると、先生が・・・」

「あら、平気よ。私の伯父様が貴方の学園の理事長だもの」

璃紗さん。

貴女に常識は通用しないんですね。

あなたの魔の手から逃げるためにこの偏差値の無駄に高く無駄に金
がかかる学園に入学したんですよ。

広告に「幼馴染の手から逃げるにはぴったり！
つて書いてあつたのに・・・
つか、はめやがつた？
なのに・・・

理事長の名前、なんか違和感があつたんですよ。

あなたの伯父様の学園でしたか。

あはは・・・

「コレは偶然ですかね。」

「貴方がその学園に入るって聞いたから心配で・・・伯父様に權力で理事長になつてもらつたの」

もう、なんなんですかね。

いやがらせでしうか・・・

ああ、今日は絶対大雪だ。
世界滅亡だ。

そんな僕にも気づかず、

「さあ、カフェに入りましょ。」

なんていつてるし・・・

泣きたい・・・

璃紗さんの「カフェに行こうか」は悔れない。

今は、カフェの中

ああ、こんな日が来る気がしていた・・・。
魔の手から逃げられる気がしてませんでした。
だつて小さいころ

「瑠ちゃんは私と結婚するのよ。いい?」

つて言われて、結婚の意味をあまり知らなかつた僕は
「うん!...けつこんしょーね」
つて言つちゃつたんだよ。
覚えてない事を願います。
神様仏様アーメン!...!

「ねえ、私達がした、昔の約束覚えてる?」

・・・・・

¥(。口¥) ロロハダロ? (ノロ。) ノボクハダアレ?

「いりーーー現実逃避するな!! 作者も顔文字辞書から引用して文
を省くな!!」

ああ、ばれちゃつた。

「あら? 私、なんか最後変な事言つてなかつた?」

僕も思いました。

作者つて誰ですか?

まあ、どうでもいいです。

それより・・・・

「ねえ、今年、私何歳か知ってる?」

えーと僕より2歳上のはず……

「16……歳ですか?」

恐る恐る聞いてみた。

これで予想年齢と実際年齢に差がある。しかも予想年齢の方が高かつたりしたら……。

「……殺される

「ひえ……」

「どうしたの? それよりそり、16歳よ。16歳と言えば……。」「どうやら僕に答えなさい」と言つ意味ですか?

「け……」

「言いたくない。」

「け……なによ?」

「うう……」

「結婚のできる歳ですね。」

「そう……その結婚……昔した、約束。私と結婚すると云つ約束守つてね」

「……」

「分かりました。では、貴方は後悔するでしょう。」「なんか、こわいな……」

璃紗さんは兵器オタなのを忘れていた

「「メンナサイ。ボクハアナタトコンヤクシマス。ダカラコロサナ
イテ」

「宜しい。貴方が18歳になつた時点で結婚します。いいですね？」

「ハイ。四口コンビト」

・・・

「一体僕に何があつたつて？」

「こんな状況に立たされたらきっと、誰でも言わざる得ないだろ？
それは5分前・・・・・

「・・・・・」

「分かりました。それは結婚したくない。という意味ですね？」

僕は首を縦にぶんぶん振った。

「貴方は後悔するでしょう。」

そう言つて僕に銃口を向けた。

「り、璃紗さん。それ、偽物ですよね・・？」

「ええ。水鉄砲よ。」

は・・・?

み水鉄砲?

それで俺が怖がると?

「ツブ」

思わず笑つてしまつた。

「何がおかしいのよ。もつといわ。」

そうですか。

「『』自由に水鉄砲なんか怖くありませんよーだ」

きつと、『』の言葉がいけなかつたんだろう。

「もう許せない」

「バシコ。ジユワー」

前と後ろから音がした。

まず、前を見よう。

璃紗姉が、般若のような顔をして先ほどの立派な水鉄砲を持つている。

後ろを見よう。

・・・・・・

「つわやーーー」

思わず奇声をあげてしまつた。

壁がドロドロに溶けてこる。

「 」

「この水鉄砲の中には鉄骨も溶かす、農硫酸とある液体を組み合わせた、物が入っているの。」

「 . . . んな、あほな。第一、その水鉄砲が溶けるんじや？」

「あら、平氣よ。この水鉄砲。フランスで作らせたの。5000度にも耐え、あらゆる液体にも耐える性質を持っているの。それに、液体が飛びやすこよに工夫もされているわ」

もつだめだ。
勝てない。

・・・

そして今になるわけです。

田の前では瑠紗さんはペラペラ結婚とか婚約発表とか兵器の話をしている。

いつになつたら終わるんじょ？・・・？

トホホ・・・・

だれだ男は根性ーーーつていったやつ。根性もクソもあるかよつか泣きたいです。

んー。

なんか、璃紗さんのイメージが崩れちゃましたね。
どうじよつ々々

だれだ男は根性！－！つていったやつ。根性もクソもあるかよつか泣きたいです。

僕は今、田の前のお嬢様に婚約の話を進められている。

困る。

全く人の話を聞かない人だ・・・

つてそんなこと言つてる場合ぢやない－！

いくらお嬢様だからつて酷いではないか？
だいたい、僕のこと好きでもないくせに。

他の婚約者と結婚したくないあまりに。

・・・

だいたい璃紗さんの事が好きかつて聞かれたら、自信満々に答えられるさ。

「あの・・・璃紗さん。僕、貴女の事、好きじゃないんですが。」

「う、僕は璃紗さんのことが好きじゃない。」

「うう、大嫌いだ。」

「なのに婚約だなんて。」

「あう。昔、私の事を好きって言つてくれたじゃない。」

「・・・」

「いつおやめす。」

記憶にあつません。

「めんなさい。じつはそんな記憶が・・・」

「え、あるんです。」

それは忘れもしないある夏休みの僕の昔の記憶

ミーンミーン

「なにか、うがまん。つやのじとおれ。」

璃紗ねえが突然額に汗を浮かばせながらそんな事を言い出した。
せみとりをしていた。

恋愛というのを知らぬ僕は

「うん！ 世界でいちばんすきだよ？」

とせみを近弐に言ひた

つあ――――――――――

しかもそのとき流されて

「大きくなつたらリサと結婚しようね」

つていつてきて僕は

「ウン！！僕と結婚してね」

つていつちやつたんだ。

でも、12年も前のこと。

てつきり忘れていたかと思つていたのに・・・

だれだ男は根性ーーといったやつ。根性もクソもあるかよつか泣きたことです。

んー

時間ががないので、適当にひきかえたりやしたりしましたwww
感想やレビューは最高にうれしいです。

のでヨロシク!!

最近は寒いので風を引かなくていいんだがそれいけね^_^

震え。(前書き)

うん。
恐怖ですね。

今僕はどうしているかって？

それは璃紗さんがトイレにいってゐる間に逃げたのです。

そう、今は学校。

じゃなくて家。

学校だと手先（校長）がいるから。

僕の親はエフ会社の社長とかまあ、歴代で社会を裏で牛耳つていてる。あ、璃紗さんとの関係（家の関係）は昔から天乃富家とは縁が深い。

天乃富家で女の子が生まれたら彩梓也家に嫁がせる。彩梓也家に女の子が生まれたら天乃富家に嫁がせる。そういう風習がある。

もちろん他の家と恋愛結婚は出来るがその場合家と縁を切ることになる。

僕的にはいやだが・・・

今は少子化の時代。

なんとあの璃紗さんしかいないのだ。だからどうちにしたつて結婚しないといけない。

だから、逃げても無駄なのだ。

だが、言つておくが決して僕はMじゃない。（僕とか言つてゐる時点で・・・by作者。）

煩い作者！。

・・・作者つてだれ・・・？

まあ、とにかく僕はMだ。（ありえないだろ・・・by作者）

煩い！！

とにかく、璃紗さんはチラ
——Sだ。

うん。

シントレジヤない限り。

とにかく、ぼくは璃紗さんに振り回されたくない。

絶対に。

ぼくは断る。

ここん

「お坊ちやま、璃紗様がお会いになりたいとの事。会わなへば殺しますよ（ハート）といつておられました。」

・・・・・

わあ、断るんだ。

どうした腰！！

なぜ腰が動かない。

立てないではないか。

•
•
•
•

どうした手！！

震えているではないか。

どうした足

震えていて立てないではないか。

コレを世間一般では腰を抜かすといつのか。

二
h
h

「よ～く～も～に～げ～た～わ～ね～」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

怖い。

普通に怖いです。

璃紗さん・・・・・

震え。（後書き）

あ、何気に瑠の家がかねもつてかいてあるww
メイドが部屋に来るなんていいなア～（肝）
あ、作者女だからねww
キモイ変体オヤジじゃないしww
レズでもないからね（爆）
では～また。

一段と寒くなつてしまひました。
みかんを食べて冬を乗り切ろう～～！w

幻想。（前書き）

シリアルが混じっています。
初の璃紗さん視点です。

幻想。

世の中は腐っている。

社会を牛耳っている人物の娘あるから」といふ言葉。

私は両親がどんどん金という欲望に惑わされて腐つて人間じゃなくなつていいくのを見た。

普通の人になりたい。

貧乏でも金持ちでもなく。

いや、貧乏でいい。

いい夫がいて、愛に満ち溢れていたら。

——でも、私は今日で16歳。——

婚約者を見つけるといわれた。
父によると

「婚約者候補はいる」

との事。

会って見ると、ロリコン、変体、オヤジ。

そんな奴ばかりだった。

全て断つたら瑠斗だつたらいいといつて来た。

瑠斗は嫌いでもないし好きでもない。

—いわば、ただの幼馴染である。—

しかし、あんな変体と結婚するぐらいだつたら幼馴染の瑠斗と結婚する方がいい。

そしていろいろやりて叔父様に瑠斗の通つている学校の理事長になつてもらつた。

これから役立つだろ？

そして学校にいく気分にもなれないで外に出た。

そじりへんをぶらぶらした。

携帯がなつている。

きっと学校か父からであろう。

母がそんな心配をするはずがないから父だけ。

でも私は電話に出たら強制的に帰らせられそうで無視した。

現実逃避に気もするけど。

もう飽き飽きだ。

毎日学校では作り笑い。

時に「ふふふ」とか「おほほ」とか反吐が出そうな笑い方をする。
自慢話、いじめ、差別――

そんなものであふれていた。

もちろん作り笑いをしながらかかわりのないよつこじた。

自分で腐つてきている。

そん事思いながら歩いていた。

そしたら瑠斗が歩いているではないか。

そして声をかけたのだ。

他の婚約者達と結婚しないために

「機嫌。（前書き）

皆様、御機嫌ようww
最近寒いですね～
布団に包まつてみたいww
今回も璃紗さん視点です。
ちょっと妄想くさいですがヨロww

「ちょっと、貴方。瑠斗じゃないの？」

私は瑠斗にそつくりな人物を見つけたため、話かけた。
びっくり！な事にその人は振り返ってくれた。

瑠斗じゃないの！—ラツキ—

・・・なのに・・・

「う・・・・ま、まさか・・・

幼稚舎の時に僕を振り回してきた近所のねーちゃん・・・
しかもちょー金持ちのお嬢様。

そして僕が世界で一番嫌いな奴。

前言撤回。

今日は運勢最下位。

なんていいだすのよ？

せっかく可愛い顔しているのに・・・

「・・・・声に出てるし・・・・」

あ！！思わず可愛げのないいい方しちゃった。

怒ってるかな・・・

そう思つて瑠斗の顔を見ると真つ青な顔をしていた。
それほど会えてうれしいって事かしら

「こんにちわ。璃紗さん。僕、これから学校なんで・・・

ム。模範解答を並べて逃げる気だな・・・？

それならこつちは色気だぜい

「あら、ちょっとぐらいいいじゃない。今日はいっしょにいて貰いたいのだけど

「

あま〜〜〜い声をだしてみた。

どこからか「あま〜あい」って聞こえた気もするが・・・

「でも、今日さぼると、先生が・・・

ム まだ言つた。

でも学校はどうじょうもないか・・?

あ！こないだ、叔父様に瑠斗の学校の理事長になつて貰つたんだ
つた。

それを告げるともう死人みたいな顔をしてた。
うへん。心配をかけてると思つてゐるのね

「貴方がその学園に入るつて聞いたから心配で・・・伯父様に權
力で理事長になつてもらつたの」
だから大丈夫！つていつてあげようと思つたのに。

なんか泣きたそうな顔してゐるし。

これはカフェに連れて行くしかないな。

瑠斗への元氣すけとプロポーズ（脅し）のために

「あ～もしもし。璃紗です。叔父様。瑠斗君借りますね。・・ハイ。
有難う御座います。お体にお気をつけを。では・・・」

これでよしつと。

さあ、瑠斗クンをメロメロにしちゃるー

フフフ・・・

「機嫌」（後書き）

えつとう面白かったらバンバン小説評価してください。してくれた
方には、特にありませんww
でも励みになつたりランキングが上つたりするので、（ランキング
重視ww）ヨロシクです~

では、「機嫌よ」（なんかマリア様が見てるっぽい・・ww

～権力と圧力の対決の悪夢～権視点～（前書き）

別の人視点です。

～権力と圧力の対決の悪夢～樁視点～

りゅうちゃん……私のこと好き……？
寝てるんだから答えが返つてくるはずないよね……
ねえ、起きて？

後2分であたしは引っ越さなきやならないのに……
お父さんが、破産なんてしなければここにいたのかな。
あたしがもつといい子にしておけばここにいられたのかな……
とにかくしなければいけない事は分かつてるの。
もう一度。

もう一度りゅうちゃんに会うために……

「樁。もういくぞ……」

ああ、もういかなきや。

りゅうちゃん。

もう一度貴方に会つたために立派な人になつて戻つてきます。
それまで……まつてて……

「天乃宮 横です。よろしくお願ひします。」

私は今、りゅうくんと同じ中学、西原中学の3-B……りゅうくんと同じクラスにいる。

……そう私は転校して來たのだ。
なのにりゅうくんがいない……

「先生……彩梓也君はどうされたのですか？」

「・・・理事長の孫につれてかれたらしいぜ」

おいおい・・・学校の先生が正体を、しかもつれていかれたつて・・・
大丈夫かよ・・・

「ま、彩梓也の隣にでも座つといてくれ」

チャンス・・・・

情報では理事長の孫がりゅうくんを婚約者にしようとしているはず。
相手はりゅうくんを想つてている人がいると気づいていても誰がまでは無理だろう。

しかし、幼馴染の私は疑われているはず。

席が隣なら・・・

それに向こうが圧力で席を変えようとしても無駄・・・

明日・・・理事長は私の姉に変わるのでだから・・・

私は生徒会長に・・・

経済的な問題なら、今は彼女を上回つてているから・・・

フフフフ・・・

～権力と圧力の対決の悪夢～椿視点～（後書き）

次回は椿と璃紗サンの関係が明らかに・・・。
投票はあり難いです。

皆様のおかげでアクセス数4,627人突破！！

有難う御座います

これからも読んでくださいですw

瑠斗視点。追放者。（前書き）

今回もかな～りシリーズです。
受験が迫っているのでコメティーが思いつかない！！！
まあ、作者の言い訳はほつといてくださいww

瑠斗視点。追放者

「ふふふ・・・よくも私から逃げたわね?」

今、僕の田の前では璃紗さんが髪の毛を逆立てて・・・ものすごく怖い。

どーしようかな。

逃げ場ないし・・・

ああ~川の流れのよひご

!/?なに!!--!

コレは伝説の美空ひ り!!

誰のケー タイだよ・・・

なーんておもつてたら

「はい。 私ですわ。ええ。・・・なぜ・・・なぜもつと早く言
わなかつたのです!!!!!!!!!急ぎなさい!!今すぐ。圧力
でも法律無視でもいいから!!!!早く席を替えなさい!!..」
璃紗さんが電話にでるなりものすごく怒鳴っている・・・
なぜ?

つか最後の方ちよつとヤバ発言!!

「あの。・・・どうしたんですか?」

おそーるおそーる答えるといつものにっこり顔。

しかし、分かるのは顔が少し歪んでいて目が笑いきれでない。
作り笑い下手すぎ・・・

「ねえ。椿つて子しつてるかしら?」

椿・・・?

聞いた事があるような気もするけど・・・

「いえ? 知りません。」

この答えが無難だろ。

何を安心したのか璃紗さんはほつとしたような顔をしている。
いつたい・・・?

「^{わたくし}椿と椿は従兄弟なの。明日・・・椿とあえるわ・・・」

「そういう終わった後、璃紗さんは複雑な顔をした。」

「椿・・・天乃宮を名乗るなんて・・・許せない。追放の身のくせして・・・」

瑠斗は璃紗がそんな事をつぶやいているのを聞いていないふり本当に聞こえていないのか・・・

璃紗とは別の方向を見ていた。

瑠斗視点。追放者。（後書き）

どうもです！！

次回は読者サービス。

瑞穂さんと瑞斗の過去についてお詰しよ」と思します
お話のリクとかがあつたら感想の方でいってくださいね。
参考にさせて頂きます。

ね隠探し。～ここが純粋な女かな？～（前編）

今日は下ネタ炸裂なので氣をつけてくださいね
りゅーくん&璃紗さん視点です。

お隠探し。～つてか純粋乙女がよつ～

椿さんの話以来、璃紗さんはいつも通りの変人さんに戻った。今日は璃紗さんが僕の家に来ていて、今は僕の部屋でゲームを一緒にしている。

「ねえ、なんだかのどが乾いたー。」

ゲーム終了。

僕が負けました・・・

「聞いてるわけ！？喉乾いたんだけど。」

はあ、そんなのずっと横にいるメイドに言えばいいのに・・・

「メイドどこよ！？もう。りゅうちゃんが入れてきて。」

はあ？ つたく・・・メイドがいないなんておかしくね？

「・・・さつさといかんかい」

そいついでジャンバーの裏ポケットから拳銃をだす璃紗さん。

・・・・・

つて、おい！――日本だつづーの――！

いやいや、偽物ですよね？

でもこないだ学習してもし偽物でも、本物よりも威力が倍と分かつた。

「・・・分かりました。」

そうじつて僕は下の階にコーヒーを入れにいった。

璃紗さんはこう見えてコーヒーが好きなのだ。
うーん。

僕は璃紗さんにこき使われている気がする・・・

今日は日曜日。

明日ガツコーヒー・・・・・

おっかしいわねえ。

りゅうちゃんも男だからエロゲーとかエロビートオとかエロ本とか在りやうなのに・・・

ベットの下も机の中も金庫の中も見つからない・・・
あ、金庫には100万と通帳が入っていた。

何!? さすがに通帳までは見なかつたわよ!

「ねえ。メイドさん。健全な男が持つているよつたものりゅーちゃんは持つてないの?」

メイドさんはいつからか帰つてきていた。

「メイドさんじやないです、高橋です。瑠斗様はそのよつたものを持つてはおられません。

ちなみにピーだそうです。さすが彼女無い歴14年。」

・・・

いや、最後のピーは聞いてないから・・・

恐るべき高橋さん。

よくこんな人を雇つたなー。

余計な事いいそうなのに。つてか、もつ言つたけど。

つてか彼女いない歴14年つて!!

つてことはファーストキスもまだ!?

純粹乙女か!!!

「何してるんですか璃紗サン!-!-? ? ?

見事に瑠が帰つてきたら部屋は「ちやゴチャでした。

「ねえ。りゅう君つてほんとに男?」

なーんて失礼極まりない質問を璃紗さんはしてきましたとさ

お隠探し。～ってか純粋乙女がよつー～（後書き）

皆様ぴーの部分は分かりましたか？ｗｗｗ
でもつて次回はりゅーちゃんが学校に行きます！！！
椿さん大暴れの予感ｗｗ
瑠紗雷のち椿霞。

注：小説「お嬢様と夜空」の作者と「お嬢様の憂鬱」の作者は違います。

私こと「お嬢様の憂鬱」の作者は瑠璃です。
ヨロシクです。
最後に～

レピューブリース！～！（笑）

学校へ行こうーーへ?シリアスな話の題名がそれでいいのかって?そんなの関係

かなーりシリアスです(笑)

学校へ行こう!!――!? シリアスな話の題名がそれでいいのかって? そんなの関係ない

学校に来て見たら、びっくりした。

何で休んだのか質問攻めされるかと思つてた。

元日

先日、璃紗サンが言つていた椿という人物が学校に僕のクラスにして——隣の席に座つていた。

そしてその子の周りには男子や女子が囲っていた。

「あ、こ～せひ～ひ～。」

痛い！！みんなの視線が痛い。

「ああの・・椿さん・・・僕のことを知つていらつしやるのですか

「今、僕にはこんな事しかいえなかつた。」

「ねえ・・それ、本気で言つてる？椿のこと覚えてないの？精神科通い？」

なんか聞いた事のある台詞だな・・・

すみません。何処かでお会いしましたか？名詞を貰つた覚えはない

いんですか・・・・

僕は思つたことを素直に言つた
ペーティがぱらぱら涙のさつさ。

「虚!!!!・・・虚つて言つてよ。たつた、たつた10年前の話なの

に・・・あたし覚えてるのに・・・

彼女の顔がどんどん青くなつていいく。

僕は啞然として黙つてゐる事しかできなかつた。

「何!? あたしのがんばりはなんだつたの?? 貴方のために何もか

も捨てたのに・・・周りの人があたしを見捨てても、がんばったのに。」

もう彼女は泣いていた。

僕は理解が全く出来なかつた。

「本当に覚えてないの？ありえない・・・」

僕は・・・

「じめん。」

本当に覚えていない・・・

バシッ！

「サイテー。もういい。神も何もかも、りゅうちゃんまで、私を見捨てたんだわ。」

そんな咳きが聞こえた。

彼女は泣きながら僕を殴つた。

痛くない。

けど、胸が痛い。

僕も涙が出てきた。

もう泣きかな・・・

皆シーンとしてじつちを見ている。

そんな事を思つていたら、璃紗さんが入つてきた。

な、なんですか？

「椿！貴女は・・・自分のした事を分かつてはいるのかしら！？」

璃紗さんの顔が見えた。

こんな環縞サンの歯は見たことがないな

る 真っ赤で 目が釘りあがっていて ホーランを持ってし

つて！！ボウガン？

「ちょ、ちょつとボウガンは・・・」

「黙つてなさい！……」の子は死なないと自分の罪の重さが分から
ないのよ。」

椿さんの顔をチラツと見た。

以外にももう泣き止んでいて今は赤く顔が染まっていて下唇をかんで掌をこぶしにして今にも怒りを爆発させそうだ。

「彼女のせいで彼女の父は破産したのよ。」

璃紗さんのその一言でまた、椿さんは青くなつた

学校へ行けりうーーへ？シリアルな話の題名がそれでいいのかって？そんなの関係

人気投票を受け付ける事にしました
小説評価／感想のページで受け付けています。
投票ヨロシクです！――

次話もシリアルですがヨロシクです。

変な伏線をはつてすみません～汗

シリアル上等！！（不

今、僕の目の前にはボウガンを持つた璃紗さんと青くなつて今にも倒れそうな椿さんがいる。

「彼女のせいで彼女の父は破産したのよ。」

璃紗さんがボウガンを持ちながら叫んだ。

「彼女があの日あんなことを言わなければ・・・」

「彼女は小さいころから我が儘で自分勝手で怒るのが早かつた。もちろん、皆からはそのせいで嫌われていた。

そこに瑠斗が現れた。

「一緒にあそぼ」

この言葉をきっかけに二人は友達になった。
そしていつしか椿は瑠斗を好きになつた。

しかし、瑠斗は親によつて璃紗と結婚する事を決められていた。
「仮婚約だが。」

彼女は諦めなかつた。

父に頼み乗り気でない父を無理やり璃紗の父と対等させた。

そして、経済力の強い璃紗の父に負け、椿の父は天乃富を名乗る事を禁止され、追い出され、

破産した。

そして自殺を図つたのだ

「……………どうせやるよ。」

なるほど・・・

椿さんは、教室を飛び出して入った。

それほど大変な事態だつたのか？

「もしかしたら、椿は屋上——」

え？

「彼女は一種のうつ病でね・・・学校へ来れるはずないんだけど・・・なんせ5年間学校には登校拒否で来てないんだから。」

じ ゃ あ

「やばいわね・・・あの子は父を「よなく殺していたから・・・」

「 まわか ・・・ 」

僕たちは屋上へ向かつた

次回で、シリアルはいつたん終わりになります。

レビュー プリース。

寒いつす

椿さん絶体絶命！？～今日の日に最下位でした～スペシャル～（前書き）

今回でひとまずシリアルアスは終わります～～
お付き合い有難いございました～～

椿さん絶体絶命！？～今日の占に最下位でした！スペシャル～

「椿さん！…早まつちやダメです！…」

僕はそう叫びながら勢いよくドアを開けた。

僕は黙然とした。

「…・・・・・私、自殺なんか考えていませんわ。ただ・・・・・頭を冷やそうと思つて・・・・・」

椿さんはふうと息をゆっくりはき、フヨンスにもたれた。ギシッといふ音がした。

「私は、過去を忘れるために、仕事をずっとやつてきた。倒れるほどに・・・」

また、ギシッといふ音がした。

「ねえ、・・・・・貴女の初恋の人はこの人じゃない・・・？」

そう璃紗さんは写真を見せた。

僕じゃないのか・・・・？

「・・・・貴女が勝手に勘違いをしてこの子の名前を彩氏也 瑞斗だ

と思い込んだ。」

僕はパズルが解けた気がした。

なぜ、僕が椿さんの記憶を一つも覚えていないのか。

僕は元から椿さんを知らなかつたのだから覚えているはずもない。

「そなな・・・・・」

椿さんは青ざめた・・・・・

ギシ・・・ギシギシ――――――――――

ものすごい音が聞こえた。

見ると椿さんの姿とフローナスが見当たらぬ。

しまった！――この校舎は古い・・・

そんな事を考える暇もないはずなのに考えてしまった。

「た助けて！――」

そんな声がして我にかえった。

その声のほうに行くとフローナスは下に落ちていて最上階の窓枠に足をかけていた。

いまにもバランスを崩しおちそうな状態・・・

僕は椿さんに手を差し伸べた。

「早くつかまってください！――」

そうせかすとおどおどした椿さんが手をゆっくりと伸ばした。
その瞬間・・・

椿さんがバランスを崩し、窓枠から足が外れた。

僕はどうやったのか分からぬけど、椿さんの手を瞬時につかんだ。

後は大丈夫。僕は意外と腕力があるのだ。ひょいと椿さんは持ち上がり地面に着地した。

「あ有難う御座います。」

今は椿さんの顔が涙で歪んでいた。

後ろを見ると璃紗さんが力抜けたよつて地面に座っていた。

「瑠斗つて・・・以外と腕力あるのね・・・」

璃紗さんがまだ信じられないといふかのよがな顔をしていた。

「よく言われます。」

「今日は手伝えなくてごめんなさい。」

璃紗さんが申し分けなさそうに言つた。

「いいえ。それが普通の反応でしょ。」

と僕が言つた

「じゃあ貴方は普通じゃないわね」

と言つた。

「あ・・・ゴメンなさい」

ふと、自分の言つた事に気づいたのか口を押さえた。

やつして今日は家に帰つた。

で終わるはずもなく！！！！！

その後僕たちは先生方にたゞしつづけふり怒られた。

まず、璃紗さんは不法侵入＆不法物を学校に持ってきたことについて怒られた。

傷跡からも幾つか手つかずの破壊。

なぜか僕は先生に「女の子達に変な事をさせるなーー！」と意味不明なお叱りも貰つた。

トホホ・・・今日は最悪ですな・・・

椿さん絶体絶命！？～今日の占い最下位でした～スペシャル～（後書き）

次回は椿さんが恋をする！？編です。

皆さんの予想を裏切りながら書いていきます（笑）

やつぱりレディトー（感想＆評価）プリース～！～

では アディオ～～ス。

椿さん愛の告白？瑠斗初めてのをしちゃう！？瑠紗さん正氣？た、助けて

「西の」

椿さんが目を輝かせている。

貴方を好きになっちゃいました!!!!」

۱۶۰

「あの～現実逃避なされてません？しかも最後らへんは愛してゐになつてゐるし・・・」

あー。僕つて現実逃避激しいからなー

「つて・・・ぼ、僕のこと好きですとー?」

「はい……こないだ、助けてくださいたときに一皿ほれしちゃつ

マジですか！？

「あの～、でも昔好きになつた方は？」
「ふふつ。昔好きだつた。ですわ。」
な、なに～！？それはつまり本気に？

「ふふつ。
昔好きだった。
ですわ。」

な、なに？！？それはつまり本気？

「……私も天乃宮。どちらも愛がない結婚より、どちらかでも愛がある結婚がいいのでは？」

う・・・なんか、僕、弱みが握られている?

「まちなさいーーー私の婚約者をたぶらかしてもひひやあ困るわね。

・・・
璃紗さん。時代劇な話し方ですね。もしかして・・・とは思

うんですか
・
・

・・・・・・・・・・最後、かみましね。

こころなしが、瑞紗さんの顔が赤い。

「离沙ちゃん、お前が令藏庫に入つて、どうボヤレ飲みました？」

父が買つてきたボトル……つまり酒!!

あてこなひなえ。あつ

「ねえ、瑠？」

なんですか？僕は寒氣と戦しながらも聞いた。
否、その言葉は飲み

なぜって？

ふと、僕の唇にほんのり暖かいものが降つて来たから。

ヘテ 瑞穂さんか僕はギターを……で!!

「キスしたくなつたから。」

• • • •

ちよ、椿さん、その無言怖いつて！！

一私のりゆう君に・・・「

「あ～りつやんと婚約をしていいの私よ。」

「つまらぬの！」好むじやなこくせん。

「嫌いでもないわ。」

ちょ、火花散つてゐる！！

てか、た
助けてくださいい
ぐすん。

椿わん愛の告白へ瑞斗初めての おじいちゃんへ瑞ちゃん正気?た、助けて

注・20歳未満の飲酒は認められていません。

璃紗ちゃんの醉っ払い～！だ、誰か助けてよ～（前編）

下ネタ炸裂代2回～！

あ、あくまで下ネタの域ですから～

璃紗さんの酔っ払い～！だ、誰か助けてよ～

「うふーっとまつへーーー。」

僕は大声で叫んだ。

「なんですか？」

「なによ～。」

「一人とも、ハモツテルシ・・・

「り、璃紗さん！僕のファーストキスを奪うなんて・・・・・酷い
です！～！」

・・・璃紗さんと椿さんは『恐竜を見ました！』見たいな顔をして
いた。

「まさか・・・とは思つてたんだけどね。」

璃紗さんが苦笑しながら言つた。酔いはさめたのか？

・・・椿さんおどりかへと無言になれる癖やめてください。怖いで

すから。冗談抜きで。

？？？

乙女の恥じらいは？

大声でそんな事を叫ばないで。涙

はい！

ぐすん。どうせ 僕は彼女いない歴14年のどーでーですよーだ。

「やつぱり、りゅうちゃんは純粋乙女ねー」

ケラケラ笑う璃紗さん。

つてか、知つてましたね？

「だつて高橋さんに聞いたもの。」

高橋さんつて？

「まあ、誰でもいいじゃない。ケラケラ」

いや、個人情報の流出の恐れがあるんですが。

「つじ」とは私はりゅうちゃんの『初めて』を奪つちやつたわけか。

璃紗さんがケラケラいいながらつた。酔いためてないな。

「つてか、その言い方なんかいかがわしく聞こえますからやめてください。」

まじでやばいって。ドーハーって言つてゐる時点で一�禁にならないか心配してんのに。

【あ、そこは大丈夫。ひらがなでやつたから平氣きケラケラ b y
作者】

作者つて誰だよ！つてか、大丈夫じゃないから……！

「婚約者の私がりゅーちゃんにkissしてもなんとかおかしくないわよねー?」

「怖いですから

つか、そんなに顔近づかないで下さー。

わっかのどちらかでマツリードリルになつてゐるんですから。

「ドス

・・・・・」の状況やばくないですか?

ちなみにこりは僕の部屋。

何で璃紗さんと椿さんがいるんだーってこいつこみはおことい

・・・・・

今、僕、・・・

押し倒されてるんですが。

さ・れ・て・る だからね?

普通逆だよね?

てか、18禁なりかけてない?

・おへんな？

・おへんな・・・

助けて～」の状況、僕の血操も二つ～～～

俺

やめですか。いや、理斗が……（前書き）

ん

15 禁かな～？？ WWW

これってぎりぎり？

大丈夫だと思ひナビ WWW

や、やばいですね。りぬ、狸斗が・・・・・！

•
•
•
•

ど、どうしたらいいんだよ俺へ

あ、パニくつて俺になつてゐる。

えーと、黒川さんたるの？

ます僕は瑞穂サンに押し倒されていて

彦が死ぬ所5セントにてエリザベスにて来てゐなんですか

4セント

三センチ・・・

セントラル

後1セント

0
•
•
•
•

「……」でキスかと思つたらなんと璃紗さんは僕の肩に顔をのせた。

「スースースー」

・・・・・

寝てる。

酔いつぶれたなこの人。

「ふつ・・・」のままアダルトな事が起るのかと思いましたわ。」

つて椿さん…！いたなら助けてよ…！

「え…ほら、なんか先が気になつて。」
頬を紅色に染めながらぼつといわないで下をこ…！

先が気になつたつて…！

「う～瑠ちゃん水」

はいはい…

「ゴメンだけど椿さん、水持つてきてくれる？あ、僕も欲しい。」
璃紗さんをほつとくわけにもいかないので。

「ハイ～」

じやあ水は椿さんにまかせて…

いまわらじや遅いかな。

冷蔵庫に入つていたウコン。

ウコンを璃紗さんに渡した。

「う～頭痛い。」

とかいいながら飲み干した。

「そりやそうですよ。ボトル一本飲み干したんですから。」

そんな他愛もない話をしていると椿さんが帰つてきた。

「ハイ、水もつて来ました。」

そついつて椿さんは僕と璃紗サンに水を渡した。

普通、璃紗さんに先に渡さないかな～？？

とこうか、璃紗さんあんなことして僕を誘つてるわけ～？？

まつたく僕のこと好きじゃないくせに。
勘違いをせるような行動はやめて欲しいよね

これは璃紗に説教しねえとな。

「おい、璃紗。」

俺がそういうと璃紗はめっちゃ驚いていた。
正直そういう顔そそる。

「ねえ、椿、瑠斗に酒渡した?」

璃紗が怖い顔で聞いてくる。

やばい・・・りゅうくんがお酒を飲んだらどうなるんだろうって思つてりゅうくんには水じやなくてお酒渡しちゃつた、

私が返答に困つてると

「俺が出てきてるってことは瑠斗の奴が酒飲んだしかありえねえじ
ゃん。」

瑠くんがかっこいい顔でいつてきた。
いつものりゅうくんは可愛い、って印象だけど今はカッコイイって
顔。

「・・・俺、瑠斗じやねえよ?」

つていうか、話が飲めない。
りゅうくんどうしちやつたの？？

せめいですわ。じゃ、瑞斗が……（後書き）

ん
次はもうちょっとやばいかな。
あ、次話はお正月&年越しバージョンと普通なのがありますww

ふう・・・

今日の仕事はこれくらいかな。

今日は31日。

だから仕事はいつもの3分の1、しかも書類のまとめとか細かい仕事だけ。

天乃宮財閥の仕事を今は手伝ってるけど、りゅうしあやんが婚約認めたら彩氏也グループの仕事

を手伝う事になる。まあ、秘書になるってことだけど。

普通、天乃宮の仕事は長男がやるのに。

お兄様達は別の企業を立ち上げて、別の一室を作るそ。つ。

だから、お母様の旧姓を名乗つてゐる。

お母様の家は、彩氏也で裏社会を操り、表社会も牛耳つてゐるらしい。でも、名前は誰も知らない

いから、彩氏也つていつても誰も知らないの。

まあ、それで私には彩氏也を名乗つてゐるお兄様が3人いる。

お正月は、お兄様が唯一帰つてくれる日。

まあ、天乃富と縁切りしたわけじゃないからお正月といえど、天乃富の仕事をたつぱりやって

貰つ。

もちろん私も仕事しますよ？

挨拶に周るだけだけ。

でも、その挨拶をする件が半端じゃない。125件。

一日で周るのだから疲れる。

しかも、夜7時からは家でお正月の行事をいろいろするから、7時までで。

でも、うれしい事に日本のお正月は一日じゃない。

3日間じその仕事はする事になる。

1日目、つまり明日は椿、瑠斗とお正月を過します。

本当は椿は要らないんだけど。

この言い方、なんだか私が瑠斗のこと好きみたい。

嫌いではないけどな。

瑠斗とは一緒にいたい。

そう思つけど、私は恋なんかしたことないし、恋とかただの友愛かもわからんないし。

もうこのままでいいやつて感じ。

なんか、帰ってきて時間がたつたな。さて、もう家にかえろ。

「瑠紗様、瑠斗様からお電話です、」

ん~？ 瑠斗から？ 何の用かな。

「もしもし？？」

「うちは寝てのよ。

「あ、瑠紗さん？ 仕事終わつたみたいですね。僕も今終わつたんですけど、一緒に年越ししませ

んか？」

「へーーめずらしく……瑠斗、いつもあたしを避けてたのに、リュウトからのお誘いは本当に珍し

い。

「珍しいわね。いいわよ。じゃあ、あなたの家に行くわ。」

そして電話を切つたけど、声が聞こえた。

「璃紗さんとなんだか年越しがたつたんですね。」

つて聞こえた。

なんだか、体がほてる。

きつといつも瑠斗から聞けない言葉を聞いたからだな。

もう、瑠斗め。変なことわないのでよ。

でも・・・・年越し、楽しみだなあ。

番外編・璃紗視点　年越しどよ正月を（後書き）

明けまして、おめでとうございます！！！

初小説！！

おめでたいです！！！

あ、おめでたいのはお前の頭つて思つた方！！！

いいことですじやん。（日本語変。

まあ、とにかく、よいお年を！！

A - H a p p y N E W y e a r !!!

豹変した理科。（前書き）

なんかシリアルス??

豹変した瑠斗。

え・・・?

瑠くんじやなこいつビビリコハリト。

「だからさあ、俺は陸斗。」

はあああ。

瑠くんが瑠くんじやない??

どうこいつヒルア。

「あのねえ・・・ணணண

つて、寝ちゃつたじやないつすか!!!!

「ハア、だから瑠斗にお酒飲ませないでつてこつたのよ。

瑠斗はねえ・・・お酒を飲むと豹変するのよ。

普段、Mの瑠斗がD・Hの陸斗になるのよ。

だから、嫌だったのよ。」

いや、理由になつてませんから。

とか、よけい分けわかんなくなりましたつて。

「んー、瑠斗の中の理想の男、つて言つ奴があれよ。

馬鹿ねえ。今の瑠ちゃんでいいのに。

皆からMだつて弄られるの氣にしてたのね。

・・・・・まあ、瑠斗は本当はMじゃないけど。」

「え、最後何か言いましたか?」

「いいえー何も。」

むー?何か、隠してるなー??

でも、瑠クンにそんなことあつたんだー

瑠紗さんしか知らなかつた瑠クン。

私の知らない瑠くん。

私は何も知らなかつた。

だれが、瑠ちゃんの事を教えるものですか。

私しか知らない、瑠ちゃん。

瑠ちゃんは渡したくない。

・・・・」のモヤモヤなにわ。

瑠ちゃんは私のものだから。

誰にも渡さないから。

」のままで、いいの。

私しか、瑠斗のことを知らなくていいの。

私にだけ。

私にだけ、素顔を見せて欲しいの。

最終話 好きといつ気持ち。

じゃまだ。

こんな気持ち。

好きといつ気持ちは持つてはいけない。

親からそう教わってきたから。

・・・・

瑠斗は知らないな。

私が、・・・否、昔のあたしが・・・

どんなに最低だつたか。

瑠斗はあたしがただの氣のへんな姉と思つてゐるけど。

あたしは・・・

・・・・無意味に・・・

付き合つては別れ付き合つては別れ・・・

好きでもないのに、付き合つてといわれたら付き合つ、そんな人

だから婚約の話が来るまで、男が絶えた事がなかつた。

たぶん、40人ぐらい。

もしかしたらそれ以上かも。

断つた事がないから

10人以上を股にかけたことがある。

同じ学年の付き合ってる奴を省いた男の半分はあたしと付き合ったことがある。

今あたしはそんな昔の自分が嫌い。

大嫌い。

いつからだらう。

そのことを、昔と思えるようになつたのは。

初恋は実らないって何かで聞いた事ある。

でも、あたしの場合、初恋は実らせてはいけないもの。

自分を抑えるために。

本当は寂しかつた。

だからって男と遊んでた自分が

大嫌い。

だから、好きって気持ちを持つたら、りゅうに申し訳なくなつてくるだろ？

そしたら、あたしは瑠斗から離れていくに違いない。

婚約破棄・・・

そんな言葉が脳裏を過ぎた。

ダメ。絶対ダメ。

あたしの婚約者は彩氏也瑠斗だけ。

どんな手を使つても。

過去を隠して。

結婚するためならこの苦しげはちきれやつな気持ちを隠して。

じゃあ、この苦しげはちきれやつな思いは何？

知つてゐる。

気づいてた。

でも隠してた。

知りたくない。

でも知りたい。

ハハ・・・・どうなんだろう・・・・・

臆病なあたし。

「あ、璃紗さん！…ダメですよ…僕の家で寝ないで下さこよ。」

誰かの優しい声が聞こえた気がした。

その声はあたしを包みこんでくれるようで、あたしに安心をくれた。

あたしはふと、

他のオヤジりと結婚したくない理由だけじゃなくて、

「璃紗さんへ、びびつたんですか？」って本当は寝てるのか。
なみだ 泣？」

他の

イケナイ理由を
おもい

感じた。

お嬢様の憂鬱上巻

END

つ、ついにお嬢様の憂鬱上が終わりを迎えました！！

私も、びっくりです。

でも、区切るなにかがいいかなって思つて。

勝手ながら残りは中巻に残したいと思つます。

お嬢様の憂鬱上のテーマは、‘お嬢様’と‘つ身分のせいで(?)’始まる恋です。

お嬢様の憂鬱中のテーマは、過去に囚われた苦しい恋です。

ギャグはなくなり、シリアスと切ない純愛がほとんどになると思います。

でも！――！

瑞穂がシリアスに飽きたら番外編として、ギャグコメを書こうと思つてます。

基本的にギャグが好きなんで（笑）

私が気に入つてゐた話は「お宝探し。～つてか純粋乙女かよつ～」

です（爆）

あの話は少し下ネタ気味ですが、その分笑えると思います。w
本当に、上巻とはいえ、終わるなんて信じられないなあ～

そういえば

実はこの話、ただの自己満足のために書いた話だつたんです！！
もともと、小説を書くのが好きで。

そんな時、友人kさん（紀光）から一緒に書かないかって誘われた
んです。

そんなこんなで出来た小説がたくさん読者様と、温かい声援のお
かげ様で、

32・491アクセス突破！！

とても、とても嬉しいです。

そしてなにより、感謝しています。

3万アクセス突破って聞いたとき信じられませんでしたw w

いつの間にか、読者様は日に日に多くなつていつて・・・

とても、嬉しいより先にびっくりしました（笑）

お嬢様の憂鬱中巻でも、温かい声援といふ愛読をよみじへお願ひします！！

それでは、また、お嬢様の憂鬱中巻でお待ちしています！！

2008年、1月13日

瑠璃

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0657d/>

お嬢様の憂鬱 上

2010年10月15日09時08分発行